

美術館ニュース

no. 205
2026 7/1

設備更新工事は終盤へ 9月19日リニューアルオープン予定！

昨年12月から全館休館して続けられてきた設備更新工事は、いよいよ終盤に差し掛かりました。空調設備更新工事では3月末に新しい熱源機と現代美術棟の空調機が搬入され、配管・電気配線・計装設備の設置が進められています。照明LED化工事では、第一工区（主に現代美術棟）は5月中旬に器具交換が概ね終了し、調光制御の調整も含め6月末で完了予定です。第二工区（本館棟、シアター、レストラン等）は、国内での需要集中および世界情勢の影響が



【写真1】 かねて解体後のエレベーターシャフト内（2026年5月撮影）

心配されましたが、順調に更新工事を進めています。荷物用エレベーター更新工事では、4月下旬から5月上旬にかけてかご室や油圧ユニットが解体撤去されました【写真1】。現在新設工事が進められているエレベーターは既存のシャフト内に収める必要があるため、既設同様油圧式となります。



【写真2】 空調室外機置場の西側、来客用駐車場として使われていた場所に新設された受水槽（右側）とポンプ室（2026年5月撮影）

そこから高低差を使って館内に水を送っていたのですが、今回の更新工事で高置水槽は廃止され、受水槽から直接ポンプで給水する方式に変更されました【写真2】。

給排水管は人間で言えば血管や消化管のようなもので、その状態を良好に保つことが施設の維持管理には大切ですが、外見からはわかりにくい部分です。一方でトイレ内の各種設備については、来館される皆様にリニューアルを実感していただければと思います。職員用も含めた館内各トイレは、手洗い器や便器等の設備はもちろん、壁から天井、床まで全面的に更新され、レイアウトも一新されます【写真3、4】。館内すべての大便器が洋式の温水洗浄便座となり、車椅子対応ブース、ベビーシートやベビーベッド、オストメイトが増設されました。どなたでも使える個室トイレも2階に2室新たに設けられます。

2025-26年 群馬県立近代美術館設備更新工事③ 給排水・衛生設備更新工事

当館の館内外に敷設されている給排水管は、開館以来50年以上の使用に耐えてきました。配管は劣化すると錆などで水の流れが悪くなり、漏水の危険もあります。貴重な美術作品を収蔵展示し多くの方が訪れる建物を今後も安心安全に使い続けるため、今回、全面的に更新することになりました。

上水道を館内に引き込んでトイレや空調機械室などに送る給水管、屋内外の消火栓に水を送る消火管、そして使用済みの水を下水に流す污水管・雑排水管は、床下の地面や壁の中、天井裏を通して館内各所に繋がれています。そのため古い管を撤去して新しいものに交換するには、床を^はったり壁・天井を壊したりしなければなりません。建設当時の図面からその正確な位置が特定できない場合も多く、壁や天井を少しずつ解体してルートを確認しながら工事が進められました。

当館のようにある程度の規模を持つ施設には、上水をいったん溜める受水槽が設置されています。これまでは地上の受水槽から屋上にある高置水槽にポンプで水を上げ、



【写真3】 解体後の1階来客用トイレ（2026年1月撮影）



【写真4】 更新工事が進む1階来客用トイレ（2026年5月撮影）

3号にわたってお伝えしてきた工事レポートも今回が最後となります。当館は9月19日から、まずは現代美術棟を含む2階展示室で展示を再開する予定です。約9か月ぶりに皆様をお迎えするため、工事と並行して各展覧会の準備も進めています。長い休館となりご迷惑をおかけしましたが、リニューアル後は、これまで以上に皆様にとって訪れたい美術館になれるようソフト面も充実させていきますので、どうぞご期待ください。

令和7年度 新収蔵作品紹介

令和7年度は、基金により県ゆかりの作家、片山真理の写真3点を購入したほか、油彩その他、版画、彫刻など865点もの作品をご寄贈いただきました。この中で、小林孝亘や押江千衣子などの絵画と彫刻計60点は、これまで寄託作品として現代美術棟を飾ってきた作品です。それらをご寄贈いただくことにより、1980年代～2000年代初めを代表する現代美術作品が充実しました。

ドーミエやグランヴィルらにより19世紀フランス社会

を鋭くユーモラスに描写した版画801点は、一人のコレクターの熱意によって集められた作品群です。さらに、清宮質文の静謐な木版画3点をコレクションに加えました。

現代作家の片山真理氏からは、作品購入の機会に、かつて「群馬青年ビエンナーレ'05」で奨励賞を受賞して作家活動を始めるきっかけとなった貴重な作品をご寄贈いただきました。これらの作品から厳選し、9月19日スタートのコレクション展示「新収蔵作品紹介」で展示します。

分類	作者名	作品名	制作年	技法・材質	収蔵方法
油彩 その他	奈良美智	《Do you believe in Santa Claus?》	1995	油彩・カンヴァス	山崎信哉氏寄贈
	小林孝亘	《Paradise》ほか全21点	1986	油彩・板	山崎信哉氏寄贈
	額田宣彦	《Jungle-gym (96-21)》ほか全5点	1996	油彩・カンヴァス	山崎信哉氏寄贈
	長谷川繁	《Untitled》ほか全9点	1994	油彩・綿布	山崎信哉氏寄贈
	丸山直文	《Untitled #27》ほか全6点	1995	アクリル・綿布	山崎信哉氏寄贈
	会田誠	《犬（雪月花のうち”雪”）》	1998	アクリル、顔料、ちぎり絵用の和紙・和紙、パネル	山崎信哉氏寄贈
	高橋信行	《お座敷》ほか全3点	1999	油彩・カンヴァス	山崎信哉氏寄贈
	押江千衣子	《すずなり》ほか全4点	1994	オイルパステル、油彩、水彩・カンヴァスにモデリングペースト	山崎信哉氏寄贈
	藪島伸彦	《Donkey》ほか全7点	1999	アクリル・カンヴァス	山崎信哉氏寄贈
	杉戸洋	《STAIR CASE》	1996	油彩・カンヴァス	山崎信哉氏寄贈
	片山真理	《足をはかりに》	2005	廃材、アクリル、義足・パネル（3点組）	作者寄贈
	清宮質文	《窓のカンテラ》 （版画集『暗い夕日』6）ほか全3点	1972	木版・紙	新井昭彦氏寄贈
版 画	オノレ・ドーミエ	全628点			田中栄作氏寄贈
	J.J. グランヴィル	全87点			田中栄作氏寄贈
	ポール・ガヴァルニ	全31点			田中栄作氏寄贈
	『カリカチュール』と『シャリヴァリ』の作家たち	全55点			田中栄作氏寄贈
写 真	片山真理	《on the way home #001》ほか全3点	2016	発色現像方式印画、アルミ複合板にマウント、額装	購入
彫刻・立体	富井大裕	《覗かれた記憶の向こう》ほか全2点	1999	石膏	山崎信哉氏寄贈



01



02



03



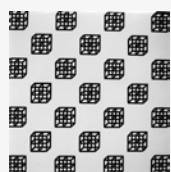
04



05



06



07



08



09



10



11



12

- 01 小林孝亘《Stray Dog》1995年
 02 藪島伸彦《Dog-Red》1999年
 03 押江千衣子《すずなり》1994年
 04 丸山直文《Summer》1997年
 05 高橋信行《お座敷》1999年
 06 長谷川繁《Untitled》1994年
 07 額田宣彦《Jungle-gym(97-18)》1997年
 08 清宮質文《入日（版画集『暗い夕日』7）》1972年
 09 オノレ・ドーミエ「できごと」171
 《ヴィクトル・ユーゴー氏とエミール・ジラルダン氏はえいやっと、ようやっとルイ皇太子を持ち上げようと四苦八苦している。それもずいぶんやわな盾にのせて！》1848年
 10 J.J. グランヴィル《灰色の水曜日（2）》1833年
 11 片山真理《on the way home #001》2016年
 12 富井大裕《覗かれた記憶の向こう》1999年
 photo：柳場大

休館中の活動レポートーボランティア活動についてー

休館中もボランティアの皆さんとともにさまざまな活動を行っています。9月の再開館にむけて、これまで以上に充実したおもてなしができるよう準備を進めています。

1

〔研修〕

① 解説研修

来館者に作品の魅力をわかりやすく伝える「解説ボランティア」を養成する研修を行っています。作品の理解を深めるため、文献調査の手法やトーク原稿の組み立て方についてのレクチャーのほか、ボランティア同士で解説しあうトーク練習にも取り組んでいます。

② コミュニケーション研修

劇作家の加藤真史氏をファシリテーターに迎え、演劇的手法を用いたコミュニケーション研修を開催しました。身体や声、即興的なやりとりを通して、コミュニケーションの難しさや奥深さを体感的に学ぶ機会となりました。研修の最後にはボランティアによる寸劇も発表されました。

③ 世田谷美術館への研修旅行

世田谷美術館を訪問し、同館のボランティアである「鑑賞リーダー」の皆さんに展览会をご案内いただきました。また、来館者に親しまれている「100円ミニワークショップ」についても実例を交えて紹介していただき、鑑賞支援やプログラム運営の工夫を学びました。



2

〔イベント班活動〕

これまで当館では、職員が企画するイベントを実施する際、当日の運営サポートをボランティアの皆さんにお願いしてきました。その一歩先として、立案の段階からボランティアの方々に関わってもらいイベントを計画しています。



3

〔資料班活動〕

長年に亘り、新聞記事の整理をボランティアの皆さんにご協力いただいています。美術館や美術展、美術作家等に関する記事を切り抜き、スクラップとして蓄積しています。日々の地道な作業が、美術館の活動を支える大切な資料となっています。



4

〔出張授業・出張ミニワークショップ〕

休館中も学校等で鑑賞体験をする「出張授業」を実施しています。出張授業は、ボランティアのスクールサポート班にお力添えいただいています。また、休館中限定のプログラム「出張ミニワークショップ」が6月から本格的に始動しました。こちらは、スクールサポート班以外のボランティアにもご活躍いただいています。



お知らせ

群馬県立近代美術館では、当館ボランティアの13期生として令和9年4月から活動していただく方を募集します。詳細は、秋頃配布予定の募集要項をご確認ください。

今 回紹介する作品は、状態を鑑みて作品としてではなく、重要な資料として令和6年度に寄贈を受けた屏風「武陵桃源図」である。傷み具合から日常的に愛用されたようで、特に第1扇、第6扇の背面とそれぞれのオゼ(扇をつなぐ部分)の状態が悪く、燻蒸処理後、破れていた背面を剥がし、裂けていたオゼで2扇ずつ分割した状態で現在は保管している。

金井烏洲(1796-1857)は江戸時代後期に活躍した伊勢崎ゆかりの南画家で、群馬における近世期の重要な作家の一人。本作品は烏洲が絵を描き、後に早世する兄・金井莎邨(1794-1824)が漢詩「桃源図」(中唐・韓愈)を讀した貴重な作例で、烏洲の款記「武陵桃源 辛巳春日写于無声詩屋 烏洲漁者」から、文政4(1821)年の烏洲26歳の制作であることがわかる。現在確認できる烏洲作品のうち、兄弟の合作は本作品が初出かつ最初期のものである。故事の桃源郷を画題とし、描写はやや粗さや拙い部分も見受けられるが、白色と桃色の花や枝ぶりなど筆数が多く真摯で、山容には伸びやかさが感じられる。弟の絵に虚構を否定し現実の武陵をうたった韓愈の詩をよせる莎邨も心憎い。

旧蔵者はかつて造り酒屋を営んだ伊勢崎の旧家で、佐野で明治期に活躍した南画家・王欽古(1830-1905)が滞在、支援されたことでも知られる。近代の烏洲顕彰が盛んな時期には当代が烏洲碑建碑委員を務めるなど金井家との関わりも感じられ、本作品も若い兄弟に援助的に制作を依頼したことが十分に推察できよう。兄弟の才を支援した地元の人々の文化的素養の高さを示す作品の一つである。今後、修復や展示も検討したいが、まずはここで作品紹介とし、寄贈者はじめ関係の皆様へ深く感謝の意を表したい。



金井烏洲「武陵桃源図」
文政4(1821)年 紙本墨画淡彩・六曲一隻屏風 142.8×318.4cm

次回展覧会案内

特別展示 「孤高の彫刻家 村山琴泉」

2026年9月19日[土] - 11月8日[日]

会場: 展示室4、5

休館日: 毎週月曜日(ただし9月21日、10月12日は開館)、
9月24日(木)、10月13日(火)

開館時間: 午前9時30分 - 午後5時(入館は午後4時30分まで)

観覧料: 一般300(240)円、大高生150(120)円

* () 内は20名以上の団体割引料金

* 中学生以下、障害者手帳等をお持ちの方とその介護者1名、
群馬県民の日(10/28)に観覧される方は無料

協力: ハラサワコレクション

村山琴泉(1885-1967)は、明治から昭和を生きた前橋出身の彫刻家です。1900年に上京し、牙彫家の金田兼次郎のもとで制作を手伝いながら学び、日本美術協会展や東京彫工会展に牙彫を出品して褒状を得るなどめざましい活躍をみせます。しかし、兵役を終え1910年に帰郷後は木彫に専念、次第に団体展から遠ざかり独自の道を歩むようになりました。牙彫で培った繊細な彫りを活かして肖像彫刻などの注文に応えたほか、「琴泉焼」と称した石彫も考案しました。彫刻の歴史を多角的にとらえる試みが盛んな今、幸いにも遺族の努力によって保存され、地元の熱心なコレクターによって蒐集された作品の数々から、孤高の彫刻家と称される村山琴泉の作品を美術館で初めて取り上げます。



村山琴泉《天狗像》
ハラサワコレクション
photo:毛利聡

